HQ
1104
J74+
Sept. 1894
no. 396

明治十八年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百九十六號

要目

大人苦心のところ

南洲の詩に有之、子孫の爲に美田を買はずと。是れ英雄苦心のある所ろ。具さに傑人の心を剖ひて切に同情を表す。

世界の日本、及其抱負

世界の日本としては、其の天職、何處にある。玆に其の特色を論明して、盛んに新日本の大抱負を表白す。

京地の風俗

山田美妙齋、西京にあそびて、風俗の異樣に感觸し、其の精細なる批評眼にうつして、玆に其の殊狀を畫がく。

時事片々の文

含雪の征かんとするに感慨深く、梧陰の去れるに痛惜多し。多幸伯とは、伊藤伯の事。華族陸奥宗光君の爲めに一言す。新條約中尤とも注意すべき點は何ぞ。基督教同志會の爲めに慶する所ろあり。

明治二十七年九月八日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百九十六號目録

社説
世界の日本、及び其抱負

畫ごゝろ
畫の趣味(二)無光

隨感
大人尤も苦心のところ
八月三十一日

雜録
京地の風俗(山田美妙)

徒然草
弔鈴木しん子(秋江子)
寒村の梟(みどり)

時事
含雲征かんとす
梧陰去れり
多幸伯
華族陸奥宗光
新條約
基督教徒同志會
女子教育者

史傳
熊澤蕃山(二)駒田信夫
勤學の時
岡山藩再び蕃山を用ゆ
蕃山の事業

時報
朝鮮國教育研究團躰○小學校裁縫科の改良○高知婦人實業會◎下田歌子女史○戰時に於ける赤十字社看護婦の給金○日清事件と基督教徒○天覽品○烈婦

悲劇 **魂迷、月中刄** (阿波寺鳴門左衛門著)
一名、桂吾良。

女學雜誌

第三百九十六號

明治二十七年九月八日發兌

社説

世界の日本、及び其抱負

日本は、啻に日本の日本たるのみならず、東洋の日本なり。東洋の日本たるのみならず、眞とに、世界の日本なり。世界の日本たることは、夙に其の命賦せられたる所ろなれども、其の普ねく之を自覺したるは、近年の事とす。世界によつて識認せらるるは、正に方今の事とす。内外、之が爲めに準備するは、即はち將來の事とす。

西洋の文明の新たに一外國に到來するや、未だ曾て吾日本國の如きに到來したることはあらざるべし。此國古來既に一特色の進歩ありけり。其根底に於て、動かざる文明ありけり。西洋の文明は、豪然として玆に入り來り、乍まち万事を己が如くなし得べしと信じて、久しからずして喫驚したり。此國最早や强大の國なり此風もはや移しがたき風なり。万古百世、文明の進歩は唯だ一道のみと思ひしに、日本に來りて初めて他の一道の發達ありしことを知りたり。東西二樣の文明、古來相離れて其同根たることを知らざりしに、玆に至つて兄弟再會し、握手して互ひに敬重することを爲せり。日本及び西洋の文明は、其の各自に唯我獨尊と思ひける誤謬を開悟したり。如此くして、二者ともに他の優遇すべきことを覺りたり。

所云る基督敎國の外國傳道に於て、果して日本の如き一外國に傳道したる先例、他に存することありや。日本に於ける、儒敎及び佛敎は、ともに其の出生地に於けるものより變遷したり。彼等は、日本に入りて既に應化したり。日本は、すでに此等を日本的に訓化したり。此等の訓化したる日本的の道あり敎あり、既に深く道敎の趣味を發達せしめたり。たとひ其の理の基礎に於て基督敎と相異なる所ろのものありと雖ども、發して國民日常の道德を涵養したる結果に於ては、西洋基督敎國に於けると大差あることなし。一般國民が道義品德に於て

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は、日本は決して所云る基督教國の民に譲るとなき也。左れば、所云る基督教の傳道が日本に於けるは、之をハワイに試ろみ、之を印度、安南、サイアムに試ろみ、之を支那朝鮮に試ろむるが如きと大懸隔あり。惟ふに、西洋基督教國の外國傳道は、日本に來りて意外千萬の新經驗を得たらん。

玆に於てか、所云る基督教國の外には未だ曾て見ざる立憲政躰は、日本に於て容易に組織せらるゝとを得たり。又、所云る基督教國相互の間だにあらざれば締結なき對等國際條約も、今や難なく完成せられんとす。即はち、日本は其特色を自覺すると共に、世界は日本の特色を識認し、玆に世界萬古に比類なき新異の大事實を發見したり。

此に於てか、日本は世界の日本となりたり。世界は、日本に就きて多く學ぶ所ろあらんとす。其の特色ある文明と、其の特色ある道教とは、就中、世界が熱聞せんと欲する所ろ也。日本の政躰と、日本の文學とは、また翻譯しがたき趣味を有す、こは世界人が來つて直接に學ぶべき所ろのもの也。

世界に立てる、日本の地位、斯の如し。日本が、世界の日本となれるは、貧女が始めて世に出づるにあらずして、天照大神が天の岩戸を開くが如し。玆に初めて世界に出稼ぎするにあらずして、世界の共同合益の央ばに立入るとを許したるなり。

既に世界に立つ。世界にあらゆる善き事、益ある事、便利なる事は、速かに吸收し、適用し、變化せしめて、更に世界に示すべき一層大なる新國粹を作らざるべからず。

今の日本は、世界列邦の間に屹立して、優に對等の交はりを爲すべき一特色、一文明、一國粹を保有せり。既に之を提げて其仲間に立出でたる以上は、將來は、列邦に優勝し、惣てを導びくに足る可き一層の進歩なかる可らず。之を世界に立ちたる日本が將來の抱負とすべし。

將來の國是は、西洋の仲間入をするにあらず、對等交際を爲すにあらず、更に進んで最優等の地歩を占むるにあり。

最優等の地歩を占むるに付きての日本の天職は、器械的の事にあらず。物質的の事にあらず。實利的の事にあらず。兵力にあらず。富にあらず。恐らくは、單に美術文學哲學等の事にもあらず。吾黨が確信する所によれば、必らずや、靈性的の事なりとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

道、德、神、の觀念に於ては、日本は優に万國に卓越すべき見込あり。日本人種が世界に優勝する天職必らずや、玆にあらん。西洋基督敎國の宗敎道義は、大ひに衰ろへたり。日本は必らずや、二十世紀の精神界に、驚ろくべきの地步を占むるものとならん。日本は、東洋の君子國たるのみならず、世界の君子國となるべきもの也。

試ろみに、此の抱負を以て今の万國を見よ、何處に顧慮す可きものやある。此の抱負を以て、韓淸事件を思へ、戰に勝ち地を增すが如きは、何の些事ぞ。日本は、到底、正義より離るべからず。日本の天職は、世界の君子たり、世界の傳道師たるとにあるとを一日も忘る可らず。

此の抱負を懷ひて、日本青年の敎育を經綸せよ。此の抱負を提さげて、西洋の文明と宗敎とを見よ。凡そあらゆる善きものは、悉とく先づ吸入せよ。國粹保存の意義をして濶大ならしめよ。單に西洋諸國に對等たらんとするが如き狹き量見をもつとなかれ。小きやせ我慢によつて意張るとなかれ。大日本は、宏深なる度量と、遠大なる識見とを以て、進步積極の大方針により、盛んに青年を鼓舞敎勵せざる可らず。

畫ごゝろ

畫の趣味（二）

無光

余嘗て九相の圖を見たり。（九相とは佛家の語にして人死してより枯骨に至る迄九度變相することなり爰には其一を擧ぐ）一の死美人の原野に曝棄せられたるあり。雨に打たれ日に照らされて幾日をか過ぎけん、毒々しき血しほはじく〳〵と流れ出でて、其中にこゝを住み家とうめくものは如何なる蛆虫やらん。嘗て玉を磨ける肌は青紫又紅に腫れ爛れ膨れ上りて目も當てられず。脣はそれ返り腐れ落ちて生白き齒を露はし、髮は蓬の如く地に委して、其根には不思議なる肉片をつけたり。烏數羽あり、慈姑の如き目の玉を引き出すもあり、そこら狼籍たる五臟六腑に喰らひ付きて、引ちぎらんとあせるもあり、或は既に滋味に飽きて彼方に飛び去るもあり。二ツの狼あり、一は最早股邊を食ひ盡して、今は腹部に其慾を逞ふしつゝあり、一は足首を嚙み切りて彼方に持ち行き、仰て天

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

恩を謝するかの様あり。又何やらん二三の小獣もこゝに集りて、其分け前に餓えたる腹を充たしつゝあり。手も半は失はれて、足も亦骨露はれぬ。昔は窈窕たる花の顔、柳の姿も、今は誰か、鼻を塞きて戰慄逃走せざるものあらんや。臭氣紙外に溢れて、余は覺へず眼を閉ぢんとせり。

かゝるもの何たる畫ぞや。最も醜猥不潔を極めたるもの、如何で畫品の中に入るを得ん。されど見よ、此畫に對するもの一人として悲慘に打たれて、酸鼻せざるものはあらざれど、戀々として此畫の前を去ること能はざるは、亦不思議なる事ならずや。即ちいやみといふものは、此畫の中には毛頭感受する能はざるなり。此畫は最もいやみあるものを畫きて、最もいやみなきものとせるなり。畫は實物に含まれたる所謂趣味を寫すものならば、何の故ありて此の如きや。余等實際に此畫の如きものを見たらんには、悶絶せんこと必せり。然かして此畫に對しては感嘆措く能はず、頻りに畫家を賞して止まざるものは果して何の故あるにや。余等は此畫家が巧みにかやうのものを畫き出したる、其才能に服するはあらず。力ある畫は作者の才能を忘れしむるものなり。余れ畫を見るとき、作者を忘れ畫を忘れ、畫其物と化し去るなり、畫に實際不潔臭汚のものを畫きあらんには、余等はやはり其臭汚なるを感せざるを得ざるなり。今此畫は最も高潔なる悲慘の情を余に與へぬ。此時余は世の名利を忘れ、世の美醜を失却し終て、純粹なる心に立返り、いふ可らざる妙趣に入りて、深く自省する處のものあるなり。アヽ、此畫家は美の境に入れる人とやいはん、余か所謂眞心を得たる人とやいはん、深山大海の心に一致和合せる人とやいはん、最も不潔なるものゝ中に最も潔よきものを見たる人にてあるなり。

此畫は巨勢弘高の筆なりと稱せられ、我邦の畫中最も古きものゝ一にして、最も古雅なるものなり。人或は曰はん、そは實物を放れ毛筆の作用によりて、穢れたるものを清きものと化し去れるなり、實物の符合に過ぎざるなり、一種の摸樣畫なるが故に、巧に實物の醜を隱蔽せるものなりと。何ぞかゝる愚をいふや。畫品は豈に然かく容易なるものならんや。實物に似たると否とは毫も畫品其物には關係せざるなり。試みに去て、彼ミクル、アンジエロの終りの裁判の畫を見よ。」

該圖は素より寫眞に縮寫せるものなれば、微かに原品の趣を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

探るを得るのみなれど、其原物のいかに貴きかは想像し得べし。幾重暗々たる黒雲は、下界に至りて愈暗く、幾萬の裸體人物其間に出沒隱現す。惡人は地獄に墮されて善人は天界に昇せらる。眞逆様になつて落ち行くもの、重なり合ひて互に助けを呼び救を叫び、此方に攫まり彼方に飛び付かんとして苦しみ悶き、腰を抱くもあり足を取るあり、毛髮逆立ちて天を睨むもあれば、涙潸々雨の如く、合掌憐みを乞ふもあり。老幼男女美醜を混じて、今は底無き奈落に陷らんとするに、善人之を悲しみて扶けんとすれども、天の命は如何とも詮なし。子は天界光明の充つる處に行けども、親は暗黑の世界に亡び、夫は神の御元に坐れども、妻は惡魔の手に捕へらる。阿鼻叫喚の聲天地に聞こえて、其殘酷なる有様は、利劍にて肝を貫かれたらんが如く、切に余が腦に入り込むなり。此畫は余等に大なる恐怖の心を與さしむるものにはあれど、而も崇嚴雄大なる光明を放てり。醜を極め酷を極めて、而かも醜ならず酷ならざるは何ぞや。

ラフエルの地獄の圖（ソドム村滅亡の圖なり）亦最も慘を極む。天火を降らし、地水を漲らし、見るだに恐ろしき怪物四邊に横行す、人は其間に在て、焼かれ、漂はされ、食はる。身に寸帛を着けず、右往左往七轉八倒の有様、之を何と評すべきや、而かも見る者之が爲めに、高き信仰に導かれて、心の穢れ洗ひ清めらる。是亦何たる不思議ぞ。

或人の話に、彼れ伊太利に在るの日、一日集畫堂を覽たり。數多の名畫に感服膽を奪はれ、頻りに嗟嘆しつゝ進み行きしに、終りに正面の壁上に掛れる、マドンナの圖を見たり。彼は覺えず跡戻りしぬ、手を擧げぬ、目動かず、口言はず、地に跪かんとし、禮拜せんとせり。之を諦視するに面自づと下り、恰も天女の其處に在すが如く感じぬ。アヽ美といふものはかやうのものにやと始めて覺りぬ。暖かく輝ける膚、凉しく透れる眼、修眉聯娟娥の揚るに似たり、朱唇的々丹もて染むるに似たり。儀姿の燁たることは旭陽の紫雲の間より升るが如き思あり。雲鬟峩々たり、花顏婉豔たり。明月天に在り、仰いで而して親しむ可らず、丹霞地に在り、望んで而して近つく可らず。意離れ、心覆りて、其前に立つことと之を久しふす。家に歸りて忘るゝ能はず。翌日再び行く、又前日の如し。猶ほ[illegible]盡きせず、復再び行く。而して益々動かされ

て家に歸り、恍然自失、神女の眼裏に髣髴たるを見たりといふ。此畫以て、木石漢をして暖かに、狂熱漢をして閑かにせしむべし。ラフエルの長所は美人に在り。美は等しく美なりされど肉の艶姿にはあらずして神の貞亮にてあるなり。誰か此畫を見て人を想ひ肉を思ふものあらんや。美人の圖實に此の如きものあるなり。

又人語て曰く、伊太利の覽ものは實に裸體美人の圖に在りと。余行かざれは知らず只其寫眞若くは縮圖に依りて見るに過ぎざれど、嬋娟たる美女の裸體、之を彼の原圖に付て見るを得ば、果して如何ばかりかと察せらる。裸體が何故に褻れ居るか、余れ知らざるなり、衣に包まれたるもの何故に婬ならざるか、余知らざるなり、美醜、是れ凡情を以て容易に臆斷すべからざるなり。深山大海に於て得たる處のものは、同じく裸體美人に於ても之を得ん。二の美人畫あり、一は裸體にして寸膚の蔽ふ處なく、一は綾羅の衣に包まる、而して前者は人をして潔からしめ、悅ばしめ、後者は人をして穢れしめ、惡ましむるものあるなり。

我邦の繪畫中、最も不可思議なるもの、鳥羽僧正の作より甚

だしきはなし。彼は如何なるものを畫けるか、實に諧謔とやいはん。尾籠とやいはん、言の名狀すべからざるものあり。一たび見るものをして、抱腹絕倒、腮はづれ、臍よじるゝに苦しむ、君子の前に之を展くに、彼猶ほ其座に堪へざらんとす。其最なるものは余爰に舒ぶるを憚るなり。彼が作中、屁合戰卷物といふものあり。赤裸の人物腰に犢鼻褌一條を纏ふ、而して半ば解けんとするものあり、或は全く奪はれて周章するものさへあるなり、屁砲轟き、屁丸奔り、四ッ逼になッて逃ぐるもあれば、後ろざまに腰を擧げて追ふもあり。兩手を振て敵を捕へんとするに、正さしく面部を射られて顏を皺め、鬘を潰したらん如きさますするもあれば、籬の陰に隱れて敵を狙擊せんとするに、機一髮、全身の力を籠めて發砲すれば、あらぬものを漏らして狼狽するもあり。或は列をなして一度にドット萬弩の力、黃烟充ちて臭氣天に冲えり、敵は色を失ひ鼻を摘みつゝ潰走散亂、得たりかしこと連發銃、しきりに屁門を振り立つるに、日本一の豪の物、名乘り掛ッて群がる羊、猛虎の勢驅け廻れば、パット開いて又もり返す力も失せて敗走するなど、卷中の人物幾百やらん、而かも烏

帽子を冠る者さへあるが、かしこに戰ひこゝに挑みて、覧る者をして一種の別乾坤に遊ばしむ。

余は正直に自白す、此畵を見るもの尾籠の感念を起す能はず、而かも諷刺的の深意ありて、痛く余等に迫り、翻て熟思せしむるものあることを。技術の上より觀ずるに、亦實に敬服せざるを得ず、人物の容姿一々活動眞に迫るものあり、骨格の如きも主觀的に善く其趣を得たり。此畵は彼の狹隘なる道德主義美術家をして、瞠若として言なからしむる處のものなり。鳥羽僧正は實に美術家中の一北斗星、明皎々たる光は萬古に亘りて、美術家を敎育する一大勢力ならずや、畵を放れ、術を棄て深く此般の趣味を探究するの人は此眞意を覺るを得ん。』

隨感

大人尤とも苦心のところ

西鄕南洲、曾て

幾歷辛酸志始堅　丈夫玉碎愧甎全

我家遺法人知否　不爲子孫買美田。

の詩を人に示し、余にして若し此言に違はゞ、言行相反したるものと言わるゝも可なりと談ぜしよし。人の普ねく知る所ろなり。

余は、此の事を思ふごとに、深く感ずると二つあり、先づ、其詩に於て、幾歷辛酸志始堅の一句のうち、始の一字、力千万斤の如くなるに感ず。南洲、道を修むる一日にあらず。事物應接の間だに、心胆を鍛え、肉に刺し骨に刻みて寧時あるとなし。彼は、如此くして始めてやうやく志堅しとは言ふ。大人の大人たる所以、深く惟ふべき也。

世の俗輩、しば〳〵偉人の心を誤まり、高踏勇退を至難の事と見做して、反つて他に尤とも苦心あるの所ろを覺らず。凡て、偉大人物の樂所は、山川に放浪し、天地に逍遙し、六合と相ひ往來して、坤輿以外に超然たる所にあり。世の名權高位に居て、汲々たる小子に相關はるが如きは、もとより身の煩わしとする所ろ也。左れば、適當の賢良あるが故に、身の地位をゆづり、もしくは功成り用了れるが故に高蹈して自ら退ぞくが如きは、もと其の自然の所とす。何の苦心かあらん

や。自己の爲めに、爵位俸祿を土芥の如く委棄するは、毫末も難んぜざるべし。

南洲の心素より如此し。彼が尤とも苦心の所ろ、尤とも實行しがたきの所として、而して敢て修練し、肯て揚言するとを得たるの大覺悟は何んぞや。曰く、子孫の爲に美田を買はずと。呼、子孫の爲めに美田を買はず。これ熱愛切思の英傑に於て、いかに苦心の所ろぞ。

兵に器械なかる可らず、而も時として特更ら之を備へず。一卒も惜しまざる可らず、而も時として之を殺す。地の利、尤とも擇はざる可らず、而も時として難地に置く。凡そ如此き殺情敢忍の事を耐え來りて、而して遂に子孫の爲めに思ふ、呼、子孫の爲めに美田を買はずと。

英傑、何すれぞ、子孫を安樂ならしめんとを欲すべき。但だ之を成人せしめ、只だ之を英豪ならしめんが爲めに、彼の美田、彼の金錢、は彼に大ひなる利益あらずやと思ふ。彼が事業を起さんとき、遺傳の財産は、大ひなる助力あらずやと思ふ。凡そ子を熱愛せる所ろの英雄其人は、幾度か此邊に於て煩悶したるとなかる可らず。南洲遂に曰く、子孫の爲めに美田を買はずと。而して、彼は、此を尤とも實行しがたかりし一修養の事なるかの如くにして人に盟ひたり。彼は、名位爵祿を貪ぼるとあらば則はち吾を責めよと言はず。彼は、賢良に讓らず、勇踏高退せざることあらば則はち我を責よと言はず。反つて如此き平凡の人情の如くなる一事に於て、やうやく以て人に盟ひぬ。余は、彼が尤とも苦心せし消息を惟ふて、獨り太はだ感ず。

八月三十一日

八月三十一日、横濱より東京に還る。時に、第一師團に召集せられたる、充員、後備兵、滊車内に塡塞し、見送りの、老父母、妻子、停車場に充滿す。彼の召集せられたるものを見れば、漁夫の如きあり、八百屋の如きあり、肴うりの如きあり、百姓の如きあり。之を送るものを見れば、涙、眼にあり、懸念、顏色にあり。告別、極めて重々しく、辭儀太はだ長し、勇ましきが如くして悲しく、壯んなるが如くして打ちしめりぬ。停車場の掛員も、此日は言葉づかい非常に鄭寧に、車内の他の客も、席を讓つて見えぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同時、青山博士、恙なく香港より歸朝せらるるあり。顏色蒼白なり、窓より面てを出して告謝せらる。夫人、幼兒、出で迎ひて、同じく車内にあり。他の知人も、凱旋するの爲躰なり。

滊車、横濱を發するとき、彼の召集せられしものを見送るもの數百名、一聲に「万歳」と唱ふ。何の万歳ぞ、聲、大にして何にとなく、物さびたり。滊車、横濱に着するや、雲霞の如き歡迎者、青山君万歳と大呼す。帽を振るもの旗を振るが如し、旗を立つるもの、軍旗飜翻たるが如し。西洋人數名、驚異して立てり、他の客も皆な、蹈とゞまれり。余は、落涙して、心中無聲、大日本万歳と呼唱したり。

歸りしものは、學術の戰に凱旋したり、夫人令兒、今ま之を歡迎す。往くものは、支那の戰に奮鬪せんとす、老人、家内、今ま之を見送る。

余は、此日の如く、奇異なる熱感を懷きしは、多くあらず。胸に涙あり、頰に微笑あり、口に聲なく、全身、力あるの心地して、少らく默然として立ちぬ。而して后ち沈思しつゝ我廬に歸りぬ。

雑録

京地の風俗

山田美妙

今の京坂地の風俗は年一年と東京風に傾くが、殊に坂地は一入である。比較すれば京都は稍保守の氣味合ひ、處女がまだ男子を怖れる風躰、遠くからそろそろと東京風に感染するが、剽輕に飛び移るのは極まりが悪いといふやうな樣子、何處やらに優美な俤が髣髴とする。大坂は蓮葉娘、京都とは雲泥の相違、すべて事業の土地だけあつて活動の氣味は見えるが、風情は無い。京都は何處と無く折り目正しいやう、着物なり道具なり質實な物を細かく用ゐて分厘の無駄を許さず、何と之を比へていいか、其言ふに言はれぬ靜寂の氣味が有つて靜夜寛く殘月の下に眠つて居るかのやうに見える段は東京や大坂の夢にも思ひ至れぬ所、折り折りの風情有る時雨で全くは心の埃まで濕らせてあるかに見える。京の名物は時雨に紅染め——希はくは一生に一度幽禪の幔幕を醍醐あたりの花に亘

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

して閑に時雨に濡れても見たい。京美人の濃化粧、よしや東京の目で見て野暮と見えたにしろ、美しい段は何うしても美し、瓜核の京都顔、よしや雛人形の見本にしろ、艶は何處までも艶である。今や東京と違ふ件のみ埒なく唯手當たり次第に言ひ退ける前、一二言で京都全躰を許すれば、靜かで田舍めいて濕ッぽさうで泥氣が無てそして何處やら身が屈むか、或ひは居心は絖の肌ざはりか、柔らかいが滑らず、ねッとりとし、又むッちりとし、又ふッくりとしたやうで否に生ぬるい。時候ならば栴檀を焚く殘月の夜、小夜着で寛く春寒を防いて其癖腕ぐらゐは露はす鹽梅。

第一が家などに就いての事。すべて家づくりは外から內がよく見え、ちまちまとした陰氣な造り方、それでよく整ッて固固しいところは明きらかに京都其所の特質の趣味を表した。格子に澁を塗ッて拭き込んだのも可し、骨切りの出來た海鰻見たやうに刻み目を付けた駒寄せなどの棒も可し、煩はしい程の透かし欄間も可し、兎もすれば湯殿に簾さへ懸けるのも可し、事に寄ると便所の中に地袋の有るのも可し、兎角よく敷き瓦を用ゐたがるのも可し、京間の廣さ素より可し、時に雲繝など見當たるのも食ひ付きたいほど可し、石ずくめ隨分可し、大形な美事な街燈三四條の通りにずらりと並んだ風情は東京でも見られぬ眺めで頗る可し、それが多くは夜明かしで無く十時頃からぽつぽつ消え掛かるのも節儉の主義が見えて中々可し、すべて茶氣の有る好みも可し、源氏畫のやうな庭院兎に角に「あッたら好かんがな」の流行言葉を聞くのも可し、狼の目の球の光る頃から市中が賑ひ立つのも可し…

いざや空論を廢して讀者と共に是れから新京極蛸藥師邊、東京の淺草公園といふ格の所へ遊ばうか。見れば扨賑やかな事、人浪を打ッて何れも多少の金錢を此通りへ捨てに、落として、迯がしに來る。群集の人は千差萬別、他國人素より多いが、爰で京都風俗の展覽會に接する事と思へば、熱湯また熱湯の價値無くも無い。概言するところ、殊に婦人の風俗などは東京より五六年方後れたり、甚だしいのは十年以上、不思議に又今日の東京のと更に違はぬものさへ有る、衣裳は本場の縮緬類、地合ひよりは染めで勝つ。一躰に派手な粧くり、長襦袢などは目が覺める。

言までも無く長襦袢は友禪もの、その染めから好みから眞

寶一言の批難も入らぬ。衣裳などの好みには時として有り難く無い所も見える、唯この長襦袢と帶揚げだけは日本全國京都を捨て他に例は無い。一つは京都の美人が他國より婀娜ッぽく見える原因、この長襦袢の力に在り、見得かそれとも節儉か、歩く時には兎角に裾を端折ッて長襦袢を露出させて蓮歩を移す、そもそも久米仙流の電氣の本局は此邊靈妙な所に在る。思へば配合はよく出來たもの、此婀娜ッぽさに搗てて加へて萬一東京流の瓦落八（よく言へば意氣鯔脊）を持ッて居た事ならば男子は實に鼻を抓みつぶしても猶足らぬを、唯をとなしく柔らかくしとやかに而してぽッとりとした蜂蜜風の愛嬌を持ために婀娜ッぽいのも一入引ッ立つ。客らしく見えるだけ婦人は可憐なり、紙幣なら三つ四つに細かく折ッて小さな紙入れに忍ばせて置くのが婦人らしくて愛の有る所兎もすれば東京の婦人は此美を缺く、唯京坂實に此美を占める。兩側の芝居や寄席から争ッて人を喚ぶ、——「御はいりやす」の優しい聲は正に木戸番の婦人の口から出やうとは！　噫、木戸番までが柔らかし、呼ばれて何が無し飛び込めば、「あんた東京やな」を蔭口にして東の鶉へ案内された。

ひとり京地のみでは無いが、關東と違ッた芝居の重な所は合ひ方を上手に置くことで、如何さま東側にはよく聞こえるが、その代はり兎もすれば俳優の聲色を妨げる。

田舎者が始めて芝居を見る工合ひ、狂言は何の世話物か更にわからず、俳優は女であッたが誰か知らず、座が鈍帳の事とて其段に取る所は無い。それながら來觀の人人は何れも盛粧、しかも能く食い、よく饒舌る、

是等が京地の風俗か、隣り桝に居た一群れは客に連られた藝子連で、芝居見物にも裾を曳いて來る。東京では十年の又十年のむかしの夢、盛粧の婦人は何れも帶びの後腰に扇子を挿んで、それで又殊に妙なのは單衣でも改まつては二枚襲ねだ。是いはゆる東京では賤めて言ふ一揃で、それが獨り絹物のみで無く木綿物に至つても同樣な事にするとは嗚呼所かはれば品變はるもの。

三四十分時間の見物で早くあきらめて芝居を出、更に雜踏の往來に立ち出れば、いよいよ人の熱で目も眩はる。鶴賀何某と看板揭げた新内の寄席に飛び込んで一くさり聞いて又も駭たのは東京の夢想せぬほど新内の節が奔り馬で、それで兎

角入れ撥が勝つた一條。其所を出て途中で同じく「天麩羅食いたい」の流しに逢つたが、手はやはり早過ぎた。

咽喉が乾いて苦しいまゝ、兎ある氷屋に足を曲げ、又も其愛らしい「御はいりやす」の掛け聲に送られて奥の方へ入り込めば、いや實もつて涼しさうな事。石を自由に使用したる築山に噴水のあしらひなど、園藝には長ける土地とて目の覺めるほど面白し、其邊土の間に二三の食卓を列べて客席とし、そして家では氷の外に一寸した小料理汁粉などを賣る。簡略に酒食するのは此邊に限ることで、現に自分が居た次ぎの席には大家の隱居かと思はるゝ派手な老女が一人の俳優と一人の取り巻きとを連れてさも得意で飲食して居た。すべて簡略經濟的は京坂地の固有の特質、此氷屋までが同じく其數には洩れて居ぬ。

四條の通り相變はらず奇麗なり、鐵橋の電氣祇園先斗兩町の眺め目の覺めるほど美くし、京城の繁華も思へば唯此紅粉に因つて描かれ、又唯此羅綺に因つて捲き出された。此邊の眺め此邊の趣き、言はば妙致は言外に有り、輕風に面を拭はせて悄然として欄杆に凭れば、水は薫り、風は色を含んで、山の粧すがた唯しどけ無い。

戻つて四條小橋をわたり、小間物屋「やつて」といふ名の家に舞い込んで一つ二つ流行を聞き合はせた所で、其家から客に出す「婦人化粧虎の巻」といふ一冊子を得た。

中中によく研究したもの、讀んで駭く所も有り、餘りの面白さに其儘を擧げて兎も角も評を挿んで見た。

つれ〲草

弔 鈴木しん子（共立女學校敎師）

白金に住む　秋江子

葉末にやどる露ぞちる
　夜半のあらしにさそはれて
かたむく月ともろともに
　くもかくれ行く旅路かな」
きのふはともになき人を
弔ひたりし其ひとの

けふはみづから其のかずに
　入りにしことのはかなさよ」
　　註 全校教員米國人某孃故山にて
　　　永眠せしといふ故に此句あり

こゝろばかりきをくれぐ〳〵
　たへにしきみが玉の緒を
つながんよしもなしのはな
　散りてかへらぬ悲しさよ」
花はいつしかちるものと
　かねてしれどもこれはまた
めでたきいろ香ほこり得で
　うせにしうらみいか計り」
世はうつせみのからごろも
　きつゝなれにし夢の世を
さりにしきみがあとゝへば
　面かげのみぞしのばるゝ」
久保山の上のおくつきに
　呼べど答へんかげもなく
松ふくかぜのさびしくも
　梢をはらふ音ばかり」
泣いて手向くる淚こそ
　つゆとなりてもとこしへに
きみがつか木にそゝげかし
　きみがつか木にそゝげかし」

寒村の梟

みどり

難いかな、輔翼の責、重いかな、宰相の任。權に依り、威を頼み、百年の大計なくむば、焦眉の急に處するの奇智も何にかはせむ。殷鑑遠からず、清國の李鴻章が末路の如けむ。徒らに利を思ひ功を貪り、隙を比隣唇歯の國に搆ふるものは、昔より絶ゆることなき川の水のペルシヤの國に御世知ろしける、サルタン、マームードと聞へしは、其性豁達にして智略すぐれ、只管領土を擴げむとて、月に日に隣れる國々を攻め侵して戰をのみ事となしければ、國内幾万の蒼生を撫育する、施政はいつとはなく廢りはてぬ。徵發いとしば〳〵なれば、男らはみな、かりたてられて北に南に、現世の修羅道に、骨を刻み、血を流し、紅顔家を辭し、白頭なほ郷を懷ふの暇なし。矛を枕のしき寢には、いかなる夢や通ひけむ。されば、國の内の千村万落空しく荊杞を生じ、禾は隴畝に長じて東西なきに至るも、顧みる人もなし。健婦家に殘りて、僅かに鋤を執れど、いかで夏草のしげきをはらひ得むや。秋糧未だ實のらずして、縣守りの租を索むることます〳〵急なり。一ひ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

らの殘衣をひさがむか、來む年の苦寒を如何ん。ひさがざらむか、國の法に背くを如何せむ。民はうらみ、民は恐れ、父母をして、寧しろ女を產むの勝れるを思はしめぬ。禍亂重り至れば、國民いかでこれに堪めや。いつしかに住みなれにし故里を遁れ出でゝ、境を越へて見も知らぬ外國の旅路の空の草枕に、夢にも入らで過ぎにし日を思ひ出で、悲しき夜な泣き明かす人の數も重なりければ、此のみかど登位の始めには、いと富み榮へし國民も、いつしかに散り行きて、領土の半ばは人住まぬ寒村破屋にて充たされぬ。臣下の內ちにも心あるともがらは、之をばいと憂き事に思ひてけれど、皇は智も才もいと勝れたれば、人々の諫をば一言の下に止め給ふのみなれば、みなせむなくて密かに眉をひそむるのみなりき。多き大臣のなかに、彼の唐土の公治長にもうちまさりて、いかなる鳥の聲にてもあれ、一たびそが耳に入らば、其の意を解こと掌をさすが如しといひつたへたる人ありけり。ひと日帝は狩りくらに短かき秋の日をくらして、夕月夜の面白きまゝに、草の葉に置ける露をば、駿馬の蹄にかけて踏みしだき、さちなき民が住み捨てし孤村に近き來られける。見渡せば滿目の茅屋倒れむとし、過にし日には、村人が柴折り焚きて妻や子と幾度か樂しき夕を送りけむ軒も朽ちひさしもやぶれて、さし入るゝ月影のみぞ、背戶の八重むぐらにもさはらず、所得がほに踏みあらす孤兎の跡をや照すらむ。罪なき戀に、やさしの乙女らが、袂ぬらせし木蔭には、薄尾花のみぞいや高く生ひしげりて、蟲の聲々もあはれなるに、いと光幽かに飛びかふ秋の螢火は、此里よりぞ出行きて、邊境の百草に骨を埋めし征夫の旅魂、再びこゝに歸り來つれど、昔の陰の消へはてたる故郷のさまに驚きて、過ぎし住家を尋ね佗ぶにや。他鄉にさすらふ里人の上やいかにと思ひやれば秋の木草の露さへも淚の如く、松風のさつ〳〵たるもいづれか過ぎ行く人の哀を引くの種ならざらむ。侍臣の中には誰れとても淚を呑まぬ人もなきに、帝マームードは、孤村の夕暮の哀をも何にとも見ずや、矢猛心の梓弓引きてかへさぬ上絃の傾ぶく月をながめ居たりしが、はるかあなたの破屋の門邊に生ふる老檜の枯枝に、二羽の梟の止まれるを見て、急ぎ鳥語を聞きわくる大臣を召して『あれ見よかしとなる、枯れたる枝に憩へる二羽の梟あり、いと睦しげに語らふはなに事にやあ

ゐらむ。汝急ぎ行きて聞き來れと仰せければ、大臣かしこまりて、近かき木の間をくゞり、二ツの鳥にいと深く心を止めたるさまにて進み行きしが、暫がほどにて返り來て、いとゞ困ぜし聲根にて『陛下よ、臣は彼の鳥の語れる事のかたはしを朧げながら聞き得つれど、そのなにごとなるかは今こゝに語らむ事は憚りあり』と恐る〳〵奏しけるに、名に負ふ荒帝マームードいかでかゝる答にて心を休め給はむや。烈火の如くたけり立ちて、大臣がきゝし一わたりをば餘まさず語れと責め給ひぬ。今はせむ樣もなしとて、大臣は聲も朗かに申すらく『かしこなる鳥の一羽は一ツの娘いま一羽はたゞひとつのむすこどりを持てりと思し給へ。彼等はいま此のいと靜かなる孤村の夕を樂みながら、其が子供の間なる婚儀の事を語らふなり。むすこゞもてる梟はだみたる聲を振り立てゝ「なれが娘の分として、荒れ村五十をさしそへて送らば、われ此の婚儀をたやすくうけがふべし」といふ、娘の親の梟は此れを聞きて打笑ひ「なれが望む荒れ村は、五十は愚か、百にても二百にても娘の分として送る可し。そは皇天我等の爲めに今上のマムの帝に長壽を與へ給へば、此の君のいます其間は寒村に事かくことはあるべくもあらねば」といひ捨てゝ荒れに荒れたる此の景色の凄涼なるをば、いとゞめあかずながめ入りてありぬ』と恐れげもなく奏しければ、帝は之れを聞き給ひて、持てる鞭を振り上げて、鞍の前輪を打とうち、『我いたく過てり、位に即きし始めより、民をめぐむ業はせで、よしなき爭を隣國と引起し、攻戰をのみ事としつ。祖先に受けし此國をかくあれ行くまゝに打すてまこと、其の罪かるしとせず。我は此より無道の虐政を廢て、有道の政をとゝのへなむ。時しも獵りの歸るさの荒野の中に狐兎をば得ねど、忠義に厚き我が臣が、敎へに優る獲物はなからむ。』とて欣々として王城に歸り給ひぬ。その後此帝の御世には、民草もいやさげりて、國の內至る所、榮へざる所なく、人皆仁政の德をぞたゝへける。さればいまの世までも朔風寒き冬の夕べの爐邊にも、涼風かほる夕涼みの席にも、寒村の梟とて、故老の物語りに傳られたりといふ。

時事

○含雪征かんとす

吾黨は、山縣伯の事を思ふ毎に、一種の別感情あり。方今の台閣、赤誠を寄すべきものは、ひとり殊に此人なりとす。此人、いまや大任を負ふて、遠く征かんとす。宮中に、大軍議あり、又別に陪食仰せ付らる。而して此人今や行かんとするなり。此人、さきに愛子を失なひ、亦た夫人を失ふ。自詠の歌に、

閼迦の水そゝぎながらも思ふかな、
きのふはともに手向けしものを。

嗚呼、妻子すでに逝けり。伯が感慨、抑そもいかに。日本國民が如今、伯に囑望する所、重もし。

○梧陰去れり

文部大臣として井上毅氏を失ふ、何等痛惜の事ぞ。誰か、其位を履む。冀はくは、正望を滿たせよ。

○多幸伯

伊藤伯は、幸福なる人なり。平和の運、好き惠みを此の人の上に與ふるにやあらん。古來類ひなき義戰も行はれつゝあり、條約改正も首尾能く成就したり。

○華族陸奥宗光

大勢三轉考著者の子、今や勳功によりて華族に列せらる。當年功利論の譯者、今は子爵なり。吾輩は、君が之を辭せざりしとを惜しむ

○新條約

日英新條約の骨樞は、第十五條最惠國待遇の意義の解釋にあり。而して、此の解釋は、正義と實力とによりて施こさるべし。議定書第一款に云く、安政五年條約の有功なる間は、其第二十三條の規定に準據すと。而して、右第二十三條に云く日本政府より向後外國の政府及臣民に許すべき殊典ある

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時は勃利太尼亞政府國民へも同様の免許あるべし。曰く、向後と。これ最惠國の意義を解く正當の意義ある所ろにあらずや。曰く、許すべき殊典と。これ交換的の意義ある精神にあらずや。此の正當の解釋法を以て新條約第十五條の、條件を附せずしての一句を解くべし。

○基督教徒同志會

其運動いよ〳〵壯大となりしを賀す。ことに、同志者若干名を戰地に送り、又た、醫師並に看護婦をして赤十字社の召集に應ぜしめんとする二案の如きは、尤とも眞面目なるもの也。冀ひくは、之をして實行せしめよ。

○女子教育者

第二回女子夏季學校に集まりたる地方の女子教育者は、京濱の同志者と共に、意氣頗ぶる壯んなり。相ひ約して運動せんとするの經綸遠大なりと聞く。

史傳

熊澤蕃山（其二）

駒田信夫

○勸學の時

中江藤樹こそは、德行類ひ稀なる士人なりしが、江州高島郡小川村の農夫の子にて、祖父吉長の後を繼て加藤貞泰に、伊豫の大洲に仕ふ。幼より岐嶷、老成の如くなりき。十一歳にして、大學の自二天子一以至二於庶人一一是以レ修レ身爲レ本の章をよみ、慨然志を立て、師書の乏しきが間に、苦學勉勵し、業益進む。時に父死し、母獨り故鄉にあり、伴ひ來らんと欲すれども、母肯せず。終に思慕の念止めかたく、書を遺して二君に事へざる事を誓ひ、官をすてゝ去りぬ。故鄉に歸り、母を養ひ、又程朱の學を以て子弟を率ゐ。已にして陽明全書を得るに及で、大に悟る所あり、陽明學を以て己を修め、人を導けり。鄉人悉く其德に化し、束修を行ふものも百里の外より至り、名聲天下に高く、近江聖人と稱せられたり。常に藤樹の陰に書を講ぜしにより、門人稱して藤樹先生といへり。名は原、字は惟命、與右衛門と呼び、嘿軒又顧軒と號しき。蕃山、後再び備前に召さるゝに及び、池田氏、藤樹をも尊信して聘せんとしたれども、辭して行かず。乃ち其子及び諸弟子を招聘せり。藤樹の子は、即ち宣伯、藤之丞、彌三郎等にして、皆德行

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

父に類し、共に備前に仕へ、後辭し歸れり。弟子には中川謙叔、加世八兵、中村又之允、山脇佐左、山脇又右等皆來り、祿各二百石を受けたりき。特に、謙叔は直諫を以てあらはれき。藤樹歿せし時、備前侯大に之を悼み、蕃山を遣して、賻を贈り、且神主を設けて、春秋之を祀れり。

蕃山、藤樹先生に就て苦學する事一年ばかり、大學、中庸、孝經等を修めしが、寛永二十年の五月、故ありて桐原に歸りぬ。會々父、野尻氏落魄して仕を求めて、江戸に行き、妻子を桐原に殘して去りぬ。蕃山乃ち近江の僻遠なる所に、母と妹と八人にて殘り居て、貧苦の間に考養を盡せり。其様、江州賤民の食ふ所のゆりと雜炊米麥等の屑を以て炊くといふものを食とし、魚肉酒茶を禁ずるとなし。清水紙子抔にて纔に身を蔽へり。然れども晏如として益精を勵め、螢雪の勞を積む事五年、其間に相識れる人、其家内多くて或は饑に及ばん事を憐み、仕を求めしめしかども肯はず、此頃、中江氏王守仁の書を讀て良知の旨を悅び、蕃山にも時々諭せしにより、大に心法の力を得たりけり。蕃山の學業は全く此難苦の間に成りしなり。彼の腦髓の産物は、此時に蓄積せられしなり。

○岡山藩再び蕃山を用ゆ

備前侯もとより蕃山の才識を知れりし故に、正保二年に再び之を召さんとして、其六月に、江戸にありて京極高通により て其意を通しぬ。正保二年來仕の說は非なり 正保四年二月、終に侯の聘に應して、出て仕ふ。時に年二十九才。初め岡山を去りしより、殆と十年を經たり。蕃山も池田氏の人物を知れり。先に屢、人の仕を求めんとを勸むるありても、きかず、池田氏の聘を待て應ぜしもの故あるかな。光政、蕃山を得て、大に喜び、共に國事を議し、旬月の間に、委するに國政を以てし、祿三千石を賜ふ。或はいふ先つ隊伍の士長とし四年の後。執政として三千石を賜ふと此時年三十二と 之より大に藩政を改革し、慶安元年には、侯に告げて諸の課役を除き、二年三月には侯に從ひて江戸に赴きしが、諸侯以下已に其名を聞きて、爭ひ其門に至りき。番頭に抜てられし時には、軍賦給せず、乃ち三歲の祿をかりて軍令に從て、武器一切を整ひぬ。又藩主に謂て曰く、四疆要害の處に、大夫並に隊伍の士二十人を分ちおかん、就中和氣郡八塔寺村は、播磨美作と其堺を接し、犬牙相錯はる、請ふ臣を以て之を保たしめよと。光政命じて請取口とせしむ備前邊備に大夫持の地を請取口と云。又曰く、治に居て亂を忘れざるは、古の法なり、古は士悉く私邑にありて變に備ふ、武備之よりよきはなし、然れとも此法今遽に復し難し、臣請ふ先つ之に傚て緩急に備へんと、此事又許され、因て和氣郡便宜の地を相して、田を懇し、士數十人を土着せしむ。邊警乃ち備る。四年に、又た侯に從て、江戸に赴く。此の時は已に名聲赫々、紀伊大納言賴宣以下、諸侯の之れを敬禮するもの甚た多かりき。紀伊侯にして なほ送迎、門に及びたりき。其の他、松平伊豆守信綱、板倉周防守重宗、久世大和守廣之、板倉内膳正重道、松平日向守信之、堀田筑前守正俊、板倉内膳正重矩、松平若狹守直明、松平備後守恒元、淺野因幡守長治、中川山城守久清、水野周防守忠增、本多下野守忠泰、織田内匠頭信房、久世三四郎廣也、板倉市

正重之等、其道を慕ひ、其門に遊ぶもの、枚擧に遑あらず。三代將軍家光、又其名を聞き、將に延見して、政治を問はんとせしが、其四月廿日に薨したるにより、果さゞりき。此人をして、新井君美の如く將軍の顧問に備らしめば、如何なる改革を、大政の上に見たりけん、惜むべし〳〵。

○蕃山の事業

承應元年、壬辰、此時、年三十四。郊外に樹木すくなくして、爲に旱害を、免れざるとを憂ひ、大に役夫を發して、樹を半田、龍口等の諸山にうゑしが、培養の法よかりしかば、大に繁茂して、また、槁旱の憂なきに至れり。承應三年、甲午、備前に大水あり、光政悉く府幣を發して、賑はせしかども、なほ足らず。蕃山、即ち光政に請ひて、梶田清右衞門を江戸に遣して、天樹院大夫人、(光政の夫人の母)によりて、幕府に請ひて、黃金四万兩を借りて、錢穀に換へて、窮民に賑給しければ、貧民も其災を免るゝことを得たりき。蕃山自ら封內を巡りて、民の疾苦を察し、傍ら孝悌、篤行の者を問ひ、錄して侯に上る。侯大に嘉して、篤行者には各賞を賜ひき。明年即ち明曆元年には、封內、大饑饉ありて、貧民の死に迫るもの、凡万人に及べり。侯、大に之を憂ひて、諸老臣と謀れども、決せず。蕃山曰く、緩議、日を移さば、恐くは饑莩、塗にみたんと。因て大に、府庫を開きて、人民を賑はせり。然れども、奉行等の遲緩せんとを恐れて、日夜寢食を忘れて、巡視して專ら、濟生に心を注きけり。急を救ふのあまり、或は給與を同一人に、二重にするとありき。奉行等、之を批すれば、蕃山曰く、此の如き事を顧みて、事を後らせば、其害や測られざらんと。民、因て蘇息するとを得たりき。事を謀るに英斷にして、少しも疑ふ事なきは、概ね此の如くなりき。又、妙に水利を解し、建白して、城北の堤の、水勢を殺て、之を東流に導き、南折して海に注きしかば、(後其支流を修め之より百間川といふ。)漲溢の患なかりけり。又八丈岩、平瀨、鑵莚、法界、笹瀨の諸川を疏し、其他にも溝洫を通し、堤防を築きし事、枚擧に遑なし。皆馬上一見して、其經畫を定めたりき。而して數十年の後、其蹟、必ず擧り、民皆其便を蒙り、其澤を仰けり。人問ふものあれば、蕃山答て曰く、吾治水の術に於ては、もとより民の、其地に生長せるものと、吏の、其事に熟せるものとに若かず。我は、たゞ人に取りて、善を行ふとを知るのみと。又吏の才あるもの、河村平太、渡部助右等、十人に陰陽五土の說及ひ撿田貢法を授け、之を行はしめき。後に山縣周南、備前の田制を見て、後世、王者出てたまはゞ、必ず法を此に取るならんといひき。かくの如く、心を經濟に注き、着々其歩を進むると共に、盛に文武の教を施きければ、其教化の及べると、松原一清の牛牕泊舟の詩を以ても、知るとを得べし。曰く、漁家兒女亦知ㇾ字、笑將二孝經一敎二老翁一と。

日本面積

	万千百十方里分釐
全國	二四七九四三六
中部	一四五七一一二
北海道本地	五〇六一九
九州	二六一七五四
四國	一一八〇六七
千島	一〇三三四六
琉球	一五六九一
佐渡	五六三三
對馬	四四七二
淡路	三六六九
隱岐	二一八九
壹岐	八六三
小笠原島	四五

	支那面積(方百米トル)	支那人口
全國	一一、五五五、七八一	四〇二、六八〇、〇〇〇
本部	四、〇二四、六九〇	三八六、〇〇〇、〇〇〇
滿州	九六三、九〇〇	七、五〇〇、〇〇〇
蒙古	三、三七七、二八三	二、〇〇〇、〇〇〇
西藏	一、六八七、八九八	六、〇〇〇、〇〇〇
ジュンガリヤ	三八三、三〇〇	六〇〇、〇〇〇
東土耳其斯丹	一、一二八、七〇〇	五八〇、〇〇〇
朝鮮	二三六、七八四	八百万乃至千六百万 男五、三一二、三三三 女五、二一六、六一四
暹羅	七三六、八五〇	五、〇〇〇、〇〇〇
安南	四四〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇
波斯	一、六四八、一九五	九、〇〇〇、〇〇〇

(註、統計年鑑及び一八九四年の政家年鑑等參考)

時報

◎學校、敎育

○朝鮮國教育研究團躰　辻新次、伊澤修二、西村貞、嘉納治五郎、野尻精一、日下部三之助、西村正三郎の七氏發起人となり朝鮮國の教育改良方法を研究するの目的にて一の教育團躰を組織せんとて去月廿五日朝野の教育家を一つ橋外大日本教育會に招き賛成を求めたるに出席者一同賛成し直に團躰を組織して朝鮮國教育研究會と名け事務は大日本教育會幹事之を擔當することゝなし研究の方法等は別に委員を設けて之を調査することゝなりたり

○群馬縣尋常師範學校附屬小學校の自宅課業の制限　同校にては今回尋常科の兒童に對して一切自宅課業を廢し通常に出席すれば夫れにて相當の業を修めしめ得る樣日々の教授をなすこととし又は高等科の兒童に對しては自今筆記に屬する科業の清書日課の復習は自宅にてなすべきことゝなしたれども今後總べて教科書を用ふることゝするなれは右の實施次第亦た自宅課業を殘する筈なりと右は學校の課業を輕くし身心の發達をして充分ならしめんとの旨趣に出てたるものなりといふ

○小學校裁縫科の改良　左は香川縣教育會寒川分會が決したる裁縫科改良の調査案なりと云ふ

第一、教員　(一)裁縫教員は可成正當の資格を有し且技藝學力の優等なるものを撰任する事(二)師範學校女子部卒業生及其他本科正教員の資格を有する女教員を任用せる小學校に於ては必ず之をして裁縫科を受持たしせる事(三)自今師範學校女子部に於ては一層裁縫に重きを置きて生徒を養成し又檢定試驗に於ても可成此の科の程度を高められんこと(四)小學校長は此科の教授法等を研究し且一層其監督を嚴にすべきこと

第二、教授細目　各小學校の裁縫科教授細目を一定し且嚴に之れを實行すること

第三、裁縫の材料　各小學校に於ては裁縫の材料を備置きて之れを兒童に貸與するの方法を設け以て同時に同物を教授するの方法を嚴にすること

第四、教授時間　成規の許す限りは可成多くの時間を裁縫に配當すること

第五、教授法　(一)裁縫科教授上の參考となるべき良書を撰定し各學校の教授法を改良統一すること(二)裁縫科教授の改良を圖るため講習若くは研究會を開くこと

○高知婦人實業會　高知婦人實業會は今回諸規則を改正し豫て裁縫修業の爲め東京渡邊裁縫塲を卒業したる大舘一女史を聘し實用的を主として生徒に便宜を與へ本科隨意科の二科を設け本月一日より南與力町七番地に於て教授を始むる筈にて大に生徒を募集する由

◎片々

○下田歌子女史　華族女學校の學監たりし下田歌子孃には昨年九月同學監を免ぜられ同時に同校教授に任ぜられしが間もなく賢き邊の御旨を奉じ歐洲各國宮中の禮式取調として英國へ向け出發せられしが目下龍動に滯在して專ら宮中の諸禮式貴女の交際法及び教育に關する事項を取調られ殊に同帝室に於ける各皇女殿下の御教育法に就ては詳細に研究中の由なり

○戰時に於ける赤十字社看護婦の給金　赤十字社の看護婦卒業生が戰時救護員の中に加はりて他に出張する時は月給六圓の外に給額六分の三(四圓五十錢)を增して都合一ヶ月の俸金十圓五錢を給し尙出張中食費は赤十字社の支辨にして戰地にありては陸海軍の支給なる上別に給料一ヶ月分を支給する(合計一ヶ月支給十六圓五十錢)規定なりと云ふ

○日清事件と基督教徒　基督教中央會は日清戰鬪に際して大いに盡力する所あらんとて兼て募金幷に看護婦勸誘等の遊説を爲し居たるが今回更に全國に檄を飛ばし尙ほ且つ國論を喚起せんとて關西地方へ本田庸一、原田助の二氏東北地方へ海老名彈正、武田芳三郎の二氏信越地方へ星野光多、松村介石の二氏を派遣して大に運動する筈なりといふ

○天覽品　北條侍從が先般共立女子職業學校に臨みて生徒の製作品を天覽に供すべき旨御沙汰ありしに依り去廿六日造花、裁縫、圖畫、刺繡の各種を宮内省に差出したるが今回は出來上りの品のみならで原料より仕上に至るまでの材料を合せて差出したりと

○烈婦　婦あり下谷に在り妊娠正に九ヶ月而して兒女已に三人あり夫命に應じ將さに別れ其の生計の甚た困難なるを察し低徊門を出る能はす沈吟稍久し婦怪んで之を問ふ夫告るに實を以てす婦乃ち柳眉を昂げて曰生死は問ふ所に非ず良人只當さに國に盡すべしと夫感奮涕泣門を出づ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

桂。　歸いりますか？

お松。　御免あそばせ、左樣なら。

〔民子、お松について禮して、上手へはいる。〕

赤木。　誰れかね？

桂。　あれか？ あれは僕のをぢの子だ。

赤木。　そんなら、きみのいとこだね。

桂。　僕ァちゝのゆゐ言があるんで、桂の家を繼いでるものは、僕でャァなくッてあれなんだ。あれが桂民子と名のッてる。

赤木。　それャァまた、どうしたとだ？

桂。　それにはいはれないわけがあるのさ。――何んしろ、いまの山口、人のまへではあんなともいへるが、宮城のまへゝ出たら、きみ、ぐッともすッともいへぬかへるだ。

赤木。　しかし、まァ、同僚だからねェ。

桂。　こゝに、きみ、おもしろいはなしがある。どこかの或役者だが、たぬきのおどりで大あたりさ、ところが、きみ、その興行、世に害ありと禁ぜられ、そのすぢに泣きついて見たら、豈圖らんやで、まへの金たま切り去ッてしまへとの御命令であッた。きみ、いまの世間は、みなおほきなはち丈じきをぶら〳〵、提げそこなッたら失敗さ。それを、横から助け荷なッてやる山口だ。

赤木。　それャァ、どうせ、馬鹿なやつさ。

桂。　赤木君もすこし、宮城にャァ注意したまへ。

赤木。　それャァ、きみ。

桂。　ふン、あれャァドラマのたねにャァ持ッてこいだ、人の父を毒殺したかたき。

赤木。　それくらゐの惡人に仕くんでやッてもよからうよ。――ところで、きみ、戲曲なぞァ、世に限りないたのしみ與へてくれるもんだねェ？

桂。　それャァもち論、大俗中の大聖とでもいふべきもの。その根ぞろにはびこッて、毫もけがれにそまらず、天風のあしたほころぶはちす淸きその花。人よろしくその氣をむねひろげて呼吸せよ、手にこれを取らんとせば、忽ちどろにおぼる。その深かきすがた、餘情、さぐり入れば入るほど、矢張りわからなくなる。天地のこゝろいづくに求べきか、この人生！うかり〳〵食らッてる世間の人を目さまし、おのが身をかみくだくくちを、きみ、持たしたいでは無いか？

赤木。　それャァ、その慷慨、きみはいつも尤もだ。

桂。　何にも、これが慷慨でも何んでもないさ、思想家に。

〔入相の鐘。〕

あれは入相の鐘。無常のひゞきひろがるなみ輪のやうに、智識も限りなくばよかッたに。

赤木。　きみ、もう、歸いらう。入相ひのかねにさそはれて、とでもいふのかねェ？〔立つ。〕隨分、ながくはなしたわい。

桂。　〔立ッて、ゆび指す。〕きみ、あの一とつぼしを！ 見たまへ、ちいさく一とつひかッてる。

赤木。　あれか？ しろくぴか〳〵、見えたりかくれたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

桂。かゝる自由のたましひに……
赤木。なりたき〔かほ見合はすを木のかしら〕
兩人。世の中じゃなァ。

〔入相のかねにて、幕。ぢき、引ッ返へす。〕

○返へし。

(一)大淨寺本堂の場。

〔本舞台寺の本堂、正面佛檀の書き割り、下手玄關。和尚、小僧誘善に孟子を讀ませて居る體にて、幕明く。〕

和尚。おぼへたら、もうおかッしゃれ。
誘善。よく、もう、おぼへました。
和尚。そんなら、やすまッしゃれ。
誘善。はい。お茶でも入れて來ませうか？
和尚。きのふ買うて來たのを。
誘善。はい。――しかし、女人はわるいものといふても、あの、それ、桂さまのおいと子、森の民子さまはよいおかたで御坐りますなァ？
和尚。あれはおとなしい子じゃ。
誘善。むかし亡くなッた叔父さんまだおわすれなさらず、お詣りに來ると、わたしゃいつもうれしうて。
和尚。うッ、おまいはまだ知らんが、あの桂のおや御さまは人に毒を飲まされ、お殺ろされなされたのじゃ。
誘善。えゝ、ほんと？
和尚。ほんとじゃからおや御さん、家は民子さんにゆづり、

桂さんにかたきを取れとゆゐ言なされた。しかし、その時分はまだ子どもであッて、民子さんのうちであづかしゃッた。あれはお醫者の修業して居ッたゆゑ、それから、獨逸まで行ッて來られたが、今度何にかの御思案なされさうなものじゃと、民子さんのうちでは御心配さしゃッてなァ。
誘善。それでも、かたき討ちは出來ません、自分も殺ろされませう？
和尚。さァ、それは、いま、どこでも、裁判所といふものがあッて、證據さへたしかなら、向ふはいつでもつみに落ちる、證據さへたしかなら。
誘善。桂さまは、まァ、どうするおつもりでせう？
和尚。それには、いろ〳〵込み入ッたとがあるのじゃわい。――しかし、まァ、もうおいでの筈じゃが。
誘善。えらいおそう御坐りますなァ？
和尚。けふはすこし氣を引いて見て、はげましてやりませう。

〔下手より桂洋服で、上田濱子と共に玄關に來たる。〕

桂。頼む〳〵。
誘善。どうれ？〔出る。〕
桂。和尚さんは居ますか？
誘善。はい。〔もさへ返へる。〕桂さまが來られました。
和尚。こゝへお通し申しとけ。
誘善。はい。〔和尚入る、誘善はまた玄關。〕どうぞ、こちらへ。

桂。御免。〔二人あがる。〕
誘善。これをお敷きなされい。
浪子。ありがたう御座ります。〔二人敷物にすはる。〕
桂。誘善さん、何を讀んでますか？
誘善。えゝ？
桂。何の書物です？
誘善。孟子といふ本をならうて居ります。
桂。おもしろいかね？
誘善。あの、和尚さんから、ならうて居ります。〔始終まのわるさうにして、は入る。〕
浪子。かわいゝ子ですねェ？
桂。うン。
浪子。これは何んといふお寺でせう？
桂。大淨寺さ。
浪子。大淨寺？かういふとこへ來ると、氣がしんとしますねェ？
桂。それャア、あなた、耶蘇のおてらはどうですか？
浪子。あなた、いつも、わるくちばッかり。教會は神聖なものです。
桂。しかし、あほだら經の讃美歌はとなり近處が迷惑です。
浪子。ほゝゝ、それャア、また、あなた、神をたゝへますふしがいくらおかしくッても、―それャあ、あなた、うはべはちッともかまやァしませんわ、こゝろさへ潔白なれば。
桂。潔白な人は耶蘇教のほかにもある。
浪子。それでも、聖書は、あなたゞッて讀んでるぢャアありませんか？
桂。讀んだら、それが何んです？あれもぢきにくづ屋に賣らうとおもってる。
浪子。そんなことを！あなた、あんまり無茶をいッてャァいけませんわ。
桂。ふン、まァ、人のこゝろ、なか／＼わかりにくい。あたりまへの人のやうに、うはべばかり聞いてれャアやすいことさ。しかし、まァ、いやしくも自分といふものがあるを知ッたなら、その自分が考がへねばならん。それで無けれャア、なか／＼人のむねのかなしみ、苦るしみはわからない。
浪子。それャア、あなた、深かいわけありませうが、―そんなら、聽かしてくださいな。
桂。をんなのこゝろは別段あさいから、もッとしッかり勉強しなけれャいけんです。
浪子。わたしャさうおもッてますが、毎日せわしいばかりで。それで、部屋い歸いッて書物を見ると、ぢき寐むたくなッて、仕かたがありませんから。
桂。それャア、まだ、ちャんと定めて居ないから。人はこゝろ一とつです。これをやらうとおもへば、なんでも出來んとはない。〔微笑しながら〕ねむたいなぞといふのは、自分がつくッたくせでせう？
浪子。〔うつむく。〕そんなら、わたしもこれから、一心に勉強いたしませう。
桂。何にも、むづかしいなど〻おもへば、なほむづかしい。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

わたしとちがって、何にも、ひろく深かくやらうといふわけでャァないし、わづかにをんなとして立つなら、先づ自分身づから考がへて、求めた信仰なら信仰、智識ならまた智識と、何んでも、人のいふことにしたがってうごかない見識、—これが何により必要です。まさかかったいでャァないし、くせはなほる。あなたが、よし、一週間に一時間でもいゝから、うか〳〵しないこゝろ掛けなら、必らず勉强は出來る。人はこゝろが第一です。意ぢきたなくいぢけず、また、身づからつまらないもんは相手にせんで、人のしなを落とさないやうにしなけれャァならない。

〔奥より和尙。〕

和尙。これは失禮いたしました。—これ〳〵、誘善、早やくお茶をもて來い。〔すはる。〕これは失禮いたしました、桂さん。よく、まァ、おいでくださりました。いち度、お尋づね申さねばならん筈ですが。

桂。いや、どういたしまして？

和尙。御親父さまには、この坊主もいかい御厄介になりまして、そのお子あなたさまですから、もう、御歸朝後、せめていち度はお尋づねまをす筈ですが。このとほりの見ぐるしいもので御坐りますから、つひ〳〵御無沙汰ばかり。

桂。いや、わたくしこそ。

和尙。どうもすみませぬなァ、はゝゝゝ！—それはさうと、まァ、あなたはさぞおつとめ御多忙で居さっしゃるでせうなァ？

桂。いや、もう、どうも、俗務多忙で、なほ更ら、かゝる閑靜なところが慕たはれます。

和尙。はゝゝゝ！〔誘善茶を入れて來る。〕いや、もう、こんな寺には、こじき坊主が居ります。

桂。いや、世間こそこじきで。

和尙。〔茶をのみつゝ〕この御婦人はどなたで？

桂。これはわたくしの友だちで、上田孃といはれます。

和尙。あ、桂さんの御朋友で居さっしゃるか。まァ、それはようおいでくださりました。どうぞ、お茶でも。

浪子。ありがたう御坐りまする。

和尙。桂さん、あなたさぞ、このごろは、おさとりが開らけませう？

桂。いや、なァに？

和尙。〔浪子に〕あなたさまは、いま、何んといふ學校へ行かっしゃるか？

桂。このかたは、わたくしどもの病院で、看護婦をなさって居られます。

和尙。あ、左樣ですか？—さういへば、桂さん、宮城はいまどういたして居りませう？

桂。相變らず、平氣で。

和尙。あのう、看護婦といま變なことがあるさうに聽きましたが、ほんとで御坐りますか？〔氣を引くこなし。〕

桂。看護婦と？〔浪子さかほ見合はせる。〕いや、なァに、なにも、それは何んでもないことでせうて。向ふでつまらんこ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ゝろがあッても、こッちでそれヤァ許るしません。あゝいふやつはわたくしども決してかまひませんから、不見識なものばかりが居るのでヤァ御坐りませんし。

和尙。はゝゝ、いくら宮城でも、まさかそんなとはありますまいさ。しかし、あなたも、まア、お人のいゝ。

桂。馬鹿とは？

和尙。いや、さうでは御坐りません。しかし、あなた、くづ〳〵、まア、何にをして御坐る？いくら待つもあの證據、出ないものは出ないでせう？たゞ訴たへて見たなら、せめてすこしでも、この日ごろの遺恨が晴れヤウもの。おや御さまの…………

桂。ふン、和尙さん、却ッてこちらの耻ぢをさらします。

和尙。それヤア、あなた、おや御さまの遺言をま守ッて、あの軍醫を殺すなら、あなたもまた死なねばならんのを。それを、せめて訴たへて、あれがつみに落ちるなら、おや御さまに對してもいひわけが立ちますぞ。— いや、それより、まア、香でもおたきなされい。

桂。ちョッと。〔佛壇の前に行いて、香をたく。〕

和尙。あなたさまは桂と御こいぎで居さッしヤるか？

浪子。はい、わたしはお親たしくいたして居ります。

和尙。〔小聲になり〕あの、何にかいふて居りますか、おやのとを？

浪子。いえ、何にも。

和尙。はなしませぬか？

浪子。わたしは何にも存じて居りませぬ。

和尙。さうですかなア？〔桂立つと、浪子たきに行く〕。

桂。いつも、佛寺の構造には幽玄を感じますわい。〔もどる。〕

和尙。これも遁世をいつはる俗人のすみか。〔小ごゑになり〕桂さん、早やく訴たへなされよ。

桂。しかし、事は、和尙さん、かろく出來ませんから。

和尙。しかし、あなたいつまでお考がへなされたとて、まアぐづ付くのが高尙では御坐りますまい？あなたのをぢさんをばさんばかりか、民子さんはどのくらい御心配か知れませんぞ。

桂。あれヤァ仕かたありません。〔浪子もどる。〕詣ッて來ませうか？

浪子。さうですね。

桂。そんなら、和尙さん、ちョッと詣ッて來ます。

和尙。それでは、お待ち申して居りますぞ。

桂。そんなら。

浪子。ちョッと詣ッてまゐります。〔兩人は玄關を下りろ、横手より寺男莊平。〕

莊平。これは、おまゐりで御坐りますか？

浪子。はい。

和尙、莊平。どうぞ、お早やく。

桂、浪。はい、ぢきに。〔下手へは入る。〕

和尙。莊平、ちョッといて、あたらしい菓子でも買うてこい。

莊平。かしこまりました。〔横手へは入る。〕

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

和尙。〔もとへもどる。〕あゝ、あのありさまでは、この坊主がいふ言葉もはげましにはならぬか！桂がかたみのやいば、あのむねに礪ぎ入れて、どうか、こゝろのむすぼれ、眞ッぷたつに絕たしたい〔木のかしら〕ものじゃなァ。

〔道具まはる。〕

（二）おなじく墓場

〔本舞台いち面大淨寺のうら手、墓場の躰。眞中に「男爵桂正國之墓」と記せる石塔。上手より老婆二人、おの〳〵手桶をさげていで來たる。〕

一。人と申せば、誰れしもはかないもので、きのふまでぴん〳〵して居た子どもが、けふは早やつ地のした。こんなところへ來るのはいやで御坐りますなァ？

二。いやでは御坐りますが、また人としたとが、どうせ、いち度は死にますもの、仕かたが御坐りませぬ。

一。さうですとも。きのふも、となりの子が亡くなって、わたしャ孫のむかしがおもひ出され、何んとなくおいのなみだが出ましてねェ、けふは氣ばらしがてら、まゐりにまゐりました。

二。それは、まァ。年がよっては、お互ひに大體などでャ御坐んせぬ。わたしもむかしのつれ合ひのはかへまゐり、そのついでに親類のまで賴まれましてねェ。

一。いや、もう、こしが曲がりましては、もう生きて居るのが耻ぢです。

二。さうで御坐りますとも。

〔兩人、桂が墓前に立ちどまる〕

このお墓は、まァ、あなた、よほどふるう御坐んすが、どうしたわけか、ちかごろお姫さま見たやうな子が、奇麗ななりで、たび〳〵詣りに來るさうで御坐ります。

一。それは、まァ、おいとしいこと。なにかむすめ氣のおもひ出し、つらいとでも御坐んせう。

二。へゝゝ、むすめのときがいち番氣樂でよろしい。

一。さァ、おそくならぬうちに歸いりませう。

二。左樣。また、よめにがみ〳〵…………

一。いはれぬうち、…………

兩人。歸いりませう。

〔兩人は下手へは入る。向ふより、桂は手桶、浪子は花を以っていで來たる。〕

桂。しかし、あなた、あの和尙、和尙としてはめづらしい。

浪子。それでも、わたしは何んだかすごくって。

桂。なァに、あれは、すこし考がへるものにャあたりまいのとです。〔歩み出す。〕

浪子。あなたのお言葉だって、いつもわたしにャわかりませんわ。

〔舞台の墓前に來たる。〕

桂。浪子さん、この墓です。

浪子。まァ、こゝですか？大きな草が。

〔兩人、花や手桶を置いて、よこ手の草をむしる。〕

なか〳〵はへてるでャァありませんか？

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女学生募集

校舍寄宿舍新築落成來九月廿一日開塾

輝子夙に女子の教育に關し見る所あり曩に米國に航し尋て歐米各洲を歴遊し實に九星霜を費し親しく女子教育の實況を視察し得て大に啓發する所あり今や當初の素志を實行せん爲め玆に一校舍を創設せり本塾の期する所は專ら益實を旨とし女子に必要なる學術工藝を學ばしめ家庭の事を練習し以て一家に主宰たるべき女子の本分を修養せしむるを以て主眼とす冀くは大方の諸彥最愛の令嬢をして來學せしめられんことを●規則書は應需遞送す

東京麻布仲町拾壹番地　倚松園女塾

塾主　園輝子

文學界

第二十號　八月三十日發兌

清少納言のほとり　天知
流水日記（完）　孤蝶
三日風流（下）　禿木
迷夢　鷗水
ゑばふね　朽葉
蕪村句選

其他時文には實利主義及道德主義（其一今の基督教）○けふこのごろ○蓮の露○其他新刊の評草々

發行所　下谷三輪町八十九番地　文學界雜誌社

發賣所　神田表神保町六番地　女學雜誌社

女學雜誌社出版書

西洋女禮　全

目錄

第一章　婦人紹介の事
第二章　婦人書面紹介の事
第三章　婦人訪問及名刺の事
第四章　婦人會話の事
第五章　婦人案内の事
第六章　婦人書狀の事
第七章　婦人散步の事
第八章　婦人裝飾の事
第九章　婦人朝夕宴會の事
第十章　卓食上の心得の事
第十一章　寄遇の心得の事
第十二章　音信及贈物の心得
第十三章　主婦客を遇する事
第十四章　姻婚に關する心得

定價金拾錢　郵稅金貳錢

女學雜誌社出版書

兒育草　全

本書は育兒に關する一切の事を、極めて平易に、何人にも解し易き爲めに、問答躰になし第拾四回にて完結せり、世の母たる人是非一本を供へ玉へ。

定價金拾五錢　郵稅金四錢

女學雜誌社出版書

子供のはなし　全

目次

第壹回　田舍音樂師
第貳回　菫の君
第三回　熊と旅人
第四回　風と日の喧嘩
第五回　ハイ〳〵トタ、イマ
第六回　カンとクツドの話
第七回　王にも勝てる人々
第八回　母の愛
第九回　柔順なる娘
第十回　英雄の所業

定價金三錢　郵稅金貳錢

發賣所　女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

九月五日發兌
第二十八號目錄

●朝鮮開革案……天民
(一)政閣
(二)經濟及び兵備警察
(三)敎育
(四)後藤伯
(五)蒼海老伯
●朝鮮の敎育制度を論して東邦協會の問に對ふ
●朝鮮の傳道
●はつ秋のたより……蘆壁
●某の朝鮮開導論
●臨機高嘯……評論子
戰に定義なし
戰の特別なる天職
金融と細民と商人と義献者
講學日常の如くせよ
對外硬
來るべき議會
●僞善者を謹めよ……無光
●日英新條約を讀む
●あまごひ……露葉
●道德及び法律……靜淵

發賣所 女學雜誌社書店

明治女學校生徒募集

普通二年級へ(小學高等科卒業相當の者)廿名、同三年級へ十名、高等文科一年級へ五名入學を許す志願の者は九月十日迄に申出べし●小學全科卒業の者は入校后三年にして普通科を全了するを得●學資は授業料毎月一圓二十錢寄宿料一切三圓八十錢圖書費凡そ一圓乃至二圓程とす

東京麹町區下六番町六番地
明治女學校

仙臺市 宮城女學校生徒募集

新敎員二名を增し益々內部を整頓し入學者の便益に備へり九月十日迄に入學許す

女學雜誌前號要目

朝鮮の敎育制度 是れ、東邦協會の問に對して策したるもの、韓山の新政府、何如に其の國家的敎育の制度を施行すべきや。吾黨の卑見、約して此の一篇に在り。

熊澤蕃山 近ごろ未だ蕃山の詳傳を見ず、玆に數回の學問、性格、經歷、抱負、主義、重れて太はだ有益の詳傳を掲ぐるものは、評論、こゝに在り。

女性と俳諧 俳道の女仙、此篇に於て、其の全豹を寫し盡さる。槿花一朝にしぼみ、井水一村に涸れ、彼女が限りなきの詩心は、千歲に至つ尙ほ生くるを覺ゆ。

時文片々 の文章。雪嶺善罵。白痴教育。正教會色あり。鼎軒書せず。北京に日章旗を樹し后如何。の諸文、片々よく時文を評す。南洲翁遺事。護教生

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)一回 前金十錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半部增さ定む。

本誌代價

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

發行所 東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷(電話十九番)